

武蔵野日曜集会

助主

――ヨハネ伝第14章16～31節――

1984年12月2日(武蔵野)

小池辰雄

キリストの分身 信交の現実在 四位一体 中にいなければ本当の愛することにならない 無
即無限無量 靈然・神然 助主 十字架と聖霊は離すことができない 一体一如の世界

【ヨハネ14・16～31】

16 われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、世はこれを受くこと能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18 我なんじらを遣^{のこ}して孤児^{みなしご}とはせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復^{また}われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活ければ汝らも活くべければなり。20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21 わが誠命^{いましめ}を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし。22 イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許^{もと}に來りて住処^{すみか}を之とともに為^せん。24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助主^{たすけぬし}、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万^{よろこ}の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出^{いだ}さしむべし。27 われ平安を汝らに遣す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼^{おそ}るな。28 「われ往きて汝らに來るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大^{おほ}なるに因^よる。29 今その事の成らぬ前^{まへ}に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信ぜんためなり。30 今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に對して何の権^{けん}もなし。31 されど斯^{しか}くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところ^{した}に遵^{したが}いて行^いうことを世の知らん為なり。起きよ、率^{いそ}ここを去るべし。



●キリストの分身

16 われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕^{とも}に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、世はこれを受くこと能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

キリストは「お前たちは知っている」と仰るけれども、実はまだこのご連中は本当は知っていないですよ。先を見越して言っておられる。「助主を知る」ということは即ち助主を、聖霊を体験するまでは「知る」というところには来れない。いくら頭で知ったってダメなんです。神学者はみんな頭で知っています。聖霊については書いたり語ったりするけれども、「について」語ったって、書いたってダメです、聖霊の中から告白しないのでは。告白する世界に入らないと。だから、本当の世界は告白だと言う。文学でも全部そうです。体験から告白する。頭で書いたものはダメなんです。

「助主」「パラクレートス」というのは、「パラカレオー」という動詞からくる。「パラ」というのは英語やドイツ語の「バイ」という字で「そのわきに」、「クレートス」というのは「呼ばれたもの」という意味で、「パラクレートス」というのは

「そのわきに呼び出されたもの」

という意味です。「わきに呼び出す」というのが「パラカレオー」という字です。助けるために、その人のわきに呼び出された者ということです。「呼び出された」というのは、助けるために呼び出されたということ。

16 節に「汝らと偕に」と書いてますが、「ともに」というのは「メタ」という字からくる。ここでは「ともに」。「パラ」は「わきに」。しかし、もうひとつ「エン」「うちに」というのがあるわけです。「ともに」「わきに」「うちに」。

「永遠に君たちと共にある」

というのはこの「メタ」の方です。一緒にいるということ。

「これは真理の御霊である」

と。「真理」は、とかく観念的に響くけれども。

「我は真理なり。我はまことなり」

という。キリストは活ける真理で、神の真理を具体的に顕しているもの。それが「我はまことなり」という「真理」という意味です。

「我は道なり」

「我は生命なり」

も全部これは具体的な内容です。そこに本当に実現しないものは真理ではないんです、思われているただ理屈の世界は。そういうのを普通の我々の概念で読み違いをしないように。

18 我なんじらを遺^{のこ}して孤児^{みなし}とはせず、



お前たちを遺して孤児にはしないと。だから、見捨てないと書いてある。

汝らに^{きた}来るなり。

必ずやって来るよ。これはキリストが聖霊としてやって来ることを仰ったわけです。再臨も、それはまあ含まれているでしょうけれども、御霊としてやって来る。キリストは天界におられるんですから、天界におられるのが我々一人びとりに100%に臨むためには、聖霊としてやって来るよりかしようがない。だから、御霊は即ち、キリストの分身でもあるわけです。エリシャが預言者エリヤの分身であるような、それよりもっと烈しい意味において、御霊は、御霊のキリスト、キリストの御霊と言っても差し支えないわけです。

「汝ら^{のこ}を遺して」

というのは、

「汝らを捨て去りにして」

という意味です。英語の「リーブ」という字に当たる。

●信交の現実在

19 暫くせば世は復われを見ず、

これはもうすぐ十字架にかかる直前のことですからね。

されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

19節は非常に力強い言葉です。「私が生きる」の「生きる」という字は特に、死なないような生き方、永遠の生命的な生き方をこの「ゾー」という字を使っている。

「私が生きているから、だから、お前たちも生きるんだ」

と。キリストが生きているというのは、私たちを活かす生き方なんだよな。キリストがそこで生きていたってしょうがない。我々を活かすような、働きかけるところの生き方(ヴィルクザーメス・ザイン)です。その人があると、周りが明るくなったり、嬉しくなったり、力が来たりする。それはみんなこの生き方なんです。ただ物が在るのは違う。太陽が在るといのは地球を在らしめているでしょ。また、地球の生きとし生けるものを生かしているでしょ。だから、太陽が在るというような在り方が本当に在ると言い方なんです。それが、

「我生く。ゆえに汝らは生く」

というのがそのことです。キリストが生きてあったもうことは必ず作用する。作用するところの在り方、生き方だから。我々クリスチャンがそういう在り方にならなければダメなんだよな。

「汝生きたもう。ゆえに我生く」

と、今度は一人称で自分たちは直して、

「主さま、あなたが生きてあったもうから、私も生きています」



と。「生きるで、しよう」ではない。「生きています」と、直接法一人称現在です。それが本当の信交の現実在なんです。この「しんこう」は「信交」です。もう仰がないで交わる方ではなければダメだ。魂の交わりがなかったらどうにもならん。

●四位一体

²⁰その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを
汝ら知らん。

この20節に、「居る、居る、居る」と書いてあるね。ところが、この「居る」という字がギリシア語の原文にはない。大事なものは、この「に居る」の「に」がみんな「エン」なんです。「中に」と言つて、もうあと動詞は言わない。

「その日にはお前たちは知るだろう、私が神の中に、お前たちは私の中に、私
はお前たちの中に」

と、「中に、中に、中に」と言っている。だから、この「エン」が一番大事な世界なんです。キリストは父の懷の中に、聖霊はそのの中に、私たちはそのの中にと、我々は四重の素晴らしい「中に」なんだ。「神—キリスト—聖霊—我」と、これを四位一体という。「四位一体」なんてまだ誰も言わんよ。四位一体的な事態を、これを本当の信交の現実と言います。

だから、私は

「祈り入れ、祈り入れよ」

と言う。中に入つていかなければ、本当の祈りにならない。祈りながらキリストの中に入つていかなくては。そういう気持ちに——気持ちと言つたらおかしいけれども——そういう現実になったら、みなさん、力が働きますよ。ええ。

私は非常に不幸な婦人に手を按いて祈ったときも、全く私はその中にはいつて、グーッとやったから、力が働いてしまったんだよな、キリストの力が。なかなかあれはお医者さんは絶対に治せません。あなたがたが見たら驚くような顔していたのが治ってしまった。

それがこの「中」の世界です。ただ憧れている世界ではないですよ。

「ここにあります」

ということ。だから、福音は最深の現実主義なんです——「主義」なんていう言葉は嫌いだ。なんだけれども——現実なんだ。「現実」という言葉がなぜ好きかというと、そういうわけです。「主義」なんていう言葉は嫌やだよ。「主義」というとすぐ観念にズレるからね。無教会主義だとか、民主主義だとか。

モーツァルトとか、ベートーベンとか、みんなああいう音楽は中から発している音楽だから、その中に入つて聞いたり歌わなかったら、本当の響きが出てこない。私はあのベートーベンの「ピアノ何々」とかいいうのを聞きながら、詩の世界のあることにパツと気がついた。その点で非常に楽しかった。



「その日には、我わが父の中に、汝らは私の中に、我汝らの中にということが
本当にわかるぞ」

と。聖霊が来たら、その日には分かるという。私は聖霊を受けたら、本当にこの通りだものな。もう、その中から大胆にものを言いなさいよ。本ものには必ず魂は響きますから。水を割ることはない。遠慮することはない。

●中にいなければ本当の愛することにならない

²¹わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。

「誠命」「エントレー」は英語でいうと、「コマンドメント」という字です。「誠命」というのはいろんな指図のことです。それを持っている者。そして、それを「守る」――「守る」というと、何か外側から行うように守るといふような感じに聞こえるでしょ。しかし、ギリシア語はそういう字ではない。持つて、それをどこまでも保持している、ドイツ語でいうと「エアハルテン」の意味です――それを守つて、それを内側に持つて、そしてそれをじつといつまでも内に保っているもの、保持しているもの。「保持」という言葉が一番当たるだろうね。保ち持つこと。「誠命を守る」というと、「こうしろ、ああしろ」ということを拳々服膺^{ふくよう}するように、ちよつと思うね、この「守る」という言葉が。

「誠命を心の中にじつと保持しているものは、即ち我を愛する者なり」

それは即ち、私を愛している者だと。「愛する」ということは、もうひとつ別の言葉でいうと、

「私の中にいるんだよ」

ということですよ。だから、「エン」という言葉と、「愛する」「アガパオー」という言葉は同じことになる。「愛する」というのは、「中に」いなければ本当の愛するにならないということですよ。「イン・アイナンデル」(相互内在)の関係です。我々の肉体も空気を吸つて、空気と溶け合つてやっている。肉体は生きているんだから。魂も同じ状態にならなければ生きないわけです。観念で思われている世界ではない。「我思うゆえに我あり」なんて、とんでもないんだ、デカルトなんてのは。それだから、観念にズレてしまう。非常に意識過剰になつてしまう。いいですね、それがこの信の現実です。子供には一番わかるんだよ。子供は観念なんかわからないんだから。具体的な世界です。お母さんにはとびついてくるしね、何でも非常に全部、身体で感ずる世界です。

我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』

「之に己を顕すべし」とは

「自分自身を神さまにおいて証する」

という言い方です。神さまにおいて自分自身を証しますよと。キリストも神さまの中にいなければ証はできないと言う。

「私の言うことはちつとも私が言っているのではない、神さまが言わせている。」



やることは神さまがさせている」

と、みんなそう言っているんだ、キリストは。ヨハネ伝は非常にそこがはつきりしている。芸術の世界はみんなそうだ、最後になると。みんな一如の世界から展開していく。魂が非常に創造的に、創作的になつてくる。神さまは創造の魂だからね。

●無即無限無量

22 イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、言がそこに留まるという。』

わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともに為ん。24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、ここでもちやんと言っている。

我を遣し給いし父の言なり。

キリストはこの内在關係をいろんな言葉で言っている。あともずっとそうです、もう17章まで。いかに密接な内在關係ですね、すべてが。本当に一つになっているから、今度は逆に、

「我を見よ」

と言う。徹底的に入っていると今度は、「我を見よ」と積極的にものが言えるようになる。そして、そこから我ならざる我がものを言い出す、やりだすわけです。

「罪びと」はキリストを信じて、そしてまあ、

「いつもしようがない」

というような、あれはバルト神学の悪いくせなんだ。バルトはそればかりとは言いませんけれども。それから普通の信仰がみんなそうだ、信じ仰いでいるものだから。十字架を仰ぐというようなわけだ。内村先生もよく言ったよ、

「十字架を仰ぐ、仰瞻、仰ぎみる」

というような言い方を。パウロは、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

と言った。

「私はもう生きてませんよ、キリストが生きていますですよ」

と。そこまできてないんだからね、キリストが生きていますように。そういう聖霊の世界です。無教会では、ただそれが思われたくらいの生き方なんだよ。思われているくらいだ。思われているのではないですよ、現実にはそこにいなくては。

それがどこまでも「エン」の世界です。こっちはからっぽなんだ。

「私ではありませんよ」

と言うんだから。それだから、



「無即無限無量」

と、私は言うわけです。無即無限無量。無が即ち無限無量の世界です。

「0＝∞」（ゼロ＝無限大）

であると。

「では、今まで在るところのものはどうしたらいいか」

なんて、そういう平面論理的な考え方をしたらダメだ。我々はいろんなものを持っているよ、いただいたものがある。そんなものをサムシングと思っっているうちはダメだと言っている。

「では、どうやって棄てるんですか」

なんて。「どうやって棄てるか」ではない。「有れども無き」という世界に入らなくてはいいかん。そんなものを問題にしない世界です。

「そんなものは問題にしません。あなたの無限大を問題にしています」

という世界が「ゼロ」なんだ。そうすると、こっちの「無限大」へ入ってくる。これは自分で本当に体験するまでは、私がいくら説明したつてしようがない。

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

とお釈迦さんが言ったのと同じことです。

そして、聞いているうちに、あなたがたがグングンその世界に入つて、「ああ楽しい楽しい」ということでなければ。

「まだまだ、私は……」

なんて、いつまで「私は……」なんて言っているか。「私」なんて問題にしているからいかん。問題だらけの自分を問題にしないという世界です。十字架の徹底的な贖いというのがそういうことなんです。自分の信仰なんていうものをいつまで問題にしますか。自分の心理状態がどうだって、実存の在り方がどうだって、勉強の仕方がどうだって、そんなことは全部、問題にしていない。それだから逆に、もの凄いことが展開を始める。自分で驚いてしまうですよ、正直。この秘訣を自ら体験するまではしょうがない。

あわてなくなつていいですよ。あわてなくなつていいから、私が語ることに――何回でも語りますから――語るごとに、ピリッピリッとくればいい。だからもう、神経衰弱とか何とか、そんなものはみんなどこかへ行つてしまふよ、大丈夫。

「こうしたら人がどう思うか、こうしたらすまない」

とか、そのような憶測はいらなくなつてしまふ。そして、傲慢になるんじゃないですよ。本当に平伏しているから、本当に人を包んでしまふし、担うし、ということですよ。

● 靈然・神然

「わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり」

と。キリストはいろんな言葉を言っているんだが、



「これはみんな父の言だ。私は自分で言っているのではない。言わしめられている」と。それを「靈然」という。靈的な自然です。靈然の世界。天然、自然、靈然という。あるいは、「神然」と言ったっていいよ。「神然」なんて今日初めて書くかな。不思議なものだよ、漢字というのは素晴らしい熟語ができるから。

²⁵此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖靈は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。

そのとおり。「わが名によりて」は「わが名にありて」です。助主は一切のことを教える。そして、思い出させる。「思い出させる」というのは、

「イデアの世界を思い出させる」

というようなことをプラトンが言ったが、まさにその字が使っている。プラトンの哲学も決してただ観念ではない。そして、あらゆることを、自分の言ったことが全部わかると言う。

「言いしことを思い出させて、そして全部わかる」

と。本当にそうだ。これはパウロがコリント前書1章のところでも言っているように。聖霊が来ないと、言ったことはみんなうわのそら。聖霊がくると、みんな

「ああそうだ、そうだ」

と分かってくる。これは私は自分の体験からはつきりそうだなものな。無教会時代と聖霊が来てからとは次元が違うんだ。それなのに、

「小池は変になった」

なんて言うから。何が変だ、どっちが変かと。だから、詩の世界で私はその戦いをするわけです。

●助主

「助主」という言葉を少し他にも見ようかな。あまり出てないんだ、この「助主」という言葉は。16章7節に、

「7されど、われ実を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主なんじらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。」(ヨハネ16・7)

とある。それから、15章26節、

「26父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとし、我につきて証せん。」(ヨハネ15・26)

この二つが著しいところだな。「恩恵の御霊」という言葉がヘブル書10章29節にある。

「29まして、神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許とおもうか。」(ヘブル10・

29)



「聖霊を、恩恵の御霊を侮つたら、とんでもないことになるぞ」

というわけです。それから大事な言葉がテモテ後書1章14節にある。

「¹³汝キリスト・イエスにある信仰と愛とをもって、我より聴きし健全なる言の模範を保ち、¹⁴かつ委ねられたる善きものを、我等のうちに宿りたもう聖霊に頼りて守るべし。」(テモテ後1・13～14)

「信仰と愛とをもって」は、「とをもつて」ではなく、「信仰と愛とにあつて」です。「聖霊に頼りて」も「聖霊にあつて」です。とにかく、「によりて」と書いてあつても、「にあつて」と読んでいる方が深いわけです。ここに「我等のうちに宿りたもう聖霊」とはつきり言っている。

²⁷われ平安を汝らに遺す、

「平安」は「アイレーネ」という字で、ヘブライ語でいうと「シャーローム」です。「平和」ではなくて、まさに「平安」です。

「神さまのうちに、キリストのうちに、聖霊のうちに在る」

ということが平安なんです。これが本当の平安です。平安は、そうでないところにはない。「汝らに遺す」とは「汝らに与える」という意味です。私は手紙やハガキの表書きによく「平安」と書くでしょ、

「平安があなたにありますように」

というわけで。これが「シャーローム」、ギリシア語で「アイレーネ」という。日本語で結構です。平安です。平和ではなくて平安。そこは日本語ははつきりと分けて使えるからいいよ。

わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。

あわてふためいたり、恐がつたりするなと。

●十字架と聖霊は離すことができない

²⁸「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。

神さまのところに行つて、またやつて来る。御霊としてやつて来る。

もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、

「私を本当に愛するなら私が天界に行くことを喜ぶはずだ。天界に行つて、それか

ら今度は、聖霊としてやつて来る」

と。だから、父に行かなければ、聖霊はいきなり来ない。いきなり来るなら、キリストはいきなりみんなにその聖霊を与えるところだった。ところが、聖霊を与えない。

というのは、父に行く前に十字架を通つて行くんだからね。十字架を通つて昇天してから来た。即ち、十字架を経ていなければ、聖霊にならない。十字架を通る前はキリストは



みんなに聖霊を与えなかった。ある程度の働きはあったけれども、本当には来ないんです。贖罪で、十字架で私たちは我ががすつ飛ばされた。自我がすつ飛ばされて、根底においては我々はもう我執のない人にされているわけです、十字架で。相対的な人間小池はあいかわらず我執はあるでしょう。しかし、奥にそうでない世界が来ている。これが十字架なんだ。そうすると、そこに聖霊がやってくる。そういう、すつ飛ばされたところでないところに聖霊は来ませんよ。だから、

「十字架を本当に受けなさい。本当に聖霊が来るから」

と言っている。けれども、十字架がなくても、聖霊は、ある時には無理やりに入って来るよ。パウロがそうなんだ。彼はまだ十字架が解らず、ダマスコへ威張りくさってやって来たところを、聖霊がパウロをもの凄い力ですつ倒してしまった。目が覚めて祈っていたら、今度は十字架が見えてきた。

どっちにしろ、十字架と聖霊は離すことができない。十字架ぬきになったら、今度はヘタすると、聖霊がサタンの霊と切り替わる。傲慢な霊になる。傲慢な霊はサタンですから。平伏しの霊というのは、十字架が平伏しを我々に与えているんだ。心の碎けたる世界というのはこの十字架が与えているんだから。いいですね。

でなければ、キリストは模範的な生き方をして、「私の真似をしろ」と言う。「イミタチオ・クリステイ」(キリストに倣ないて)なんて。それだったら、こっちはくたびれてしまうよ。キリストの真似なんかできやしない。

「真似をする必要はない。みんな私のものは全部お前にやるから」と。これが恵みなんだ。十字架・聖霊、全部これは恵みですから。

それだから、楽になってしまった。非常に楽だ。力が来てしようがない。

「やむを得ざるなり」

とパウロが言ったのがそのことなんです。やむにやまねずして為す。預言者エレミヤも、

「エホバの霊がやってきて、もう黙ろうと思っても、わが骨のうちに火の燃えるがごとくに神の言がきて、これを告白せざるを得ない」

とエレミヤが言ったでしょ。そういう言葉は人をうつんです。全然、自我のない言葉です。だから、そういう福音を遠慮してはいかん、水割ってはいかんと私は言っているわけです。

導き方というのは段階的にいく場合もありますよ。けれども、ある時はバツとやらなければダメです。いつまでも段階ではダメなんです。そこらはちゃんと機を見て、またその人を見てやらないとね。ある時は、もう躓いてもしょうがない。それでぶつかってきて、躓いて、それから自分で目から火が出て、やって来るという。まあいろんな場合がある。人によっていろいろですから。あまり心配しないことです。



● 一体一如の世界

父は我よりも大なるに因る。

もちろんそうです。キリストはゼロなんだから。

²⁹今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らるとき汝らの信
ぜんためなり。³⁰今より後われ汝らと多く語らじ、

もう時間がないと言う。

この世の君きたる故なり。

即ち、サタンがやってくる。

彼は我に対して何の権もなし。

サタンはもう既に荒野の試みでやつつけられている。

³¹されど斯くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところに遵いて行うこと
を世の知らん為なり。

これはなかなか、世は知りませんがともね。

起きよ、率^{いざ}ここを去るべし。

さあいよいよ去つて、私はローマの兵隊に捕まりに行くよ、というわけだ。本当の英雄だよ、キリストは。敵をやつつけるのではない。捕まえられに行くんだから。けれども、神の力が働けば、ローマの兵隊なんかみんな散り散りになるだけの力をキリストは持っている。けれども、キリストには大事な務めが、十字架につくという務めがある。大使命がある。あれは自ら十字架についたんですよ。自ら捕まえられた。ゲッセマネの祈りがそうだ。ゲッセマネという園でキリストは血の滴る祈りをされた。

まあ、イスラエルの方々の名所、大事な聖書的な所がどうなつても、ゴルゴタと園の墓場だけはそのままに遺しておきたいものだ。

「バラクレートス」^{「助主」}。ある人は、「弁護人」なんて訳す。その人に代わって語るから。

まあ、聖霊ほどの弁護人はいません。どんな弁護士がいても、聖霊にはかなわない。弁護士はいらん、聖霊という弁護人が私にはいますからと。十字架の贖いを執り成してくれる。

「我らに祈るべきかを知らざれども、聖霊言ひ難き呻^うきをもて執り成し給う」

という。あれは「嘆き」でなくて「呻き」です。異言的な呻きをもつて執り成したもう。ローマ書8章26節です。誰が何と言おうと、一向に差し支えない。自分で弁護する必要はない。聖霊が弁護していらつしやる。もうそれでたくさんだと、こういうわけです。地上ではどんなに誤解され、どんなに悪口を言われ、どんなに迫害されても、聖霊は知りたもう。その人は天界に行く。いろんなことを言うやつはみんな地獄行きだ。そういうわけですからね、御霊にあつては。だから、

「私が助主となるぞ」



と言うのと同じことですよ、キリストは。

「わが分身であるところの聖霊は来るぞ。じかじかにお前の横に、お前の中に宿るぞ」

と。だから、「わがうちなるキリスト」というのは聖霊のことです。

「汝わがうちに、われ汝のうちに」

とパウロが言っているのはみんな聖霊のキリストのことです、キリストの聖霊のことです。イエス・キリスト自身は天界にいらっしゃるんだもの。これは不可分の関係です。だから、四位一体。

「神―キリスト―聖霊―我」

これが四位一体、一如の世界です。もう言うことなしでしょ。

「それでも私は……」

なんて、なぜ言うんですか。聖霊がちゃんと弁護して、

「そんなことは問題じゃないぞ。もう全部、十字架でもって片は付いて、済んでい
るじゃないか、何考えているか」

と言ってくれる。もうそうしたら、俄然もの凄い力が出てくる、光がくる、楽になる、楽しい。本当ですよ。

それが私は無教会時代には、そこに入れないんだ。先生方は御霊のことを本当に体験してないものだから、そういう角度は――完全に体験してないとは言いませんけれども――だから、教会・無教会は大方において使徒的信仰からズレている。30人もの牧師さんたちに私が語ったら、そのうちの5、6人の牧師さんが驚いたではないですか。事実が証明している。牧師さんがその体験をしないで、説教なんかしているんだから、しょうがない。

ねえ、何となく楽になってきたでしょ。では、おしまい。

